

随想

親父の「こころ」

日本人のこころ

以前に著者の父親を少し紹介したことがある。著者の父孝夫は明治四十四年十二月四日生まれ、平成十二年の二月に八九歳で他界したので、もし生きていれば一〇〇歳になる。落ちぶれ武士の再起の場として大陸に渡った祖父に育てられた父は、貧困のうちに青少年期を過ごした。

孝夫少年が小学二年生のある日、ひよんな機会に一卷きのエナメル線（銅線）を手に入れた。彼はこれを使って、雑誌を見ながらブリキ缶を切り、手作りの直流モーターを作った。完成してから、彼はふと気付いた。電池がない。肝心の電池がないのである。貧しい親に買って欲しいと言えぬまま、彼は待ち続け

た。一年ほどで素焼きのつぼを手に入れた。さらに一年近く経ってやっと亜鉛板を入手した少年は、便所掃除用の希塩酸を用いてボルトの電池を作成し、二年前の作品、直流モーターを動かしてみたという。

『グルグルゆっくり回ったな。嬉しかったよ！』
今とはおよそ姿の異なる貧しさであった。

後に、旅順工業大学で熱工学を学んだ彼は満州鉄道の研究所に勤務し、蒸気機関車でありながら時速一七〇キロで走る「あじあ号」の開発に従事して終戦を迎えた。

平成生まれの高校卒新入社員が入社してすでに三年。著者の子どもの頃の話がすでに歴史の

中であることを考えれば、一〇〇

○年前は完全に歴史物語だろう。

NHK年末特別テレビドラマ

「坂の上の雲」は、司馬遼太郎

原作の「明治三十六年の日露戦

争を舞台としたスペクタクルと

人生論を交えた名作」だと思っ

考えてみれば丁髷のお侍時代か

ら僅か三六年後にあれだけの近

代戦を行ったことを考えれば三

〇〇四〇年は一つの時代が過ぎ

たと言える長い期間である。

父親が亡くなって約一〇年、

これまで時間に追われて確認も

しなかった手帳を一冊手に取っ

たのは先月末のことであった。

その中には、時代を越えて教え

られるメモが多く鉛筆で書き残

されている。

《日本人の心》と題したメモ

がある。

—（以下メモから抜粋）矛盾

があり、しかもそれを克服して

行動せねばならない時、人物が

製造される。理論的に克服され

るのでなく、実体的に克服され、

敵も味方も安心する。現代組織

原理とは違うし封建的のそれと

も異なる。

今日能力社会への傾斜は強い。

しかし、採点主義が能力間の衝

突を生み、能力主義は矛盾を再

生産する。よくできる人はいっ

ぱいいるが、彼らは新たな矛盾

を製造するだけで、それらの諸

矛盾をまとめる大人物がいない。

だから人物を求める声は高い。

昭和四十七年四月十一日

著者は科学に準じた生き方を

通してきた。先の文章の筆致は

加藤 宏光

著者には馴染みの薄いもので、いささか難解でもある。しかし、大意には頷けるものが多い。四〇年前にすでに「能力主義への傾斜が強く、採点主義が能力間の衝突を生む。能力主義が矛盾を再生産する」という点はとくに注目したい。能力主義と言うが、安寧の確保された時代に入っていた四〇年前にはすでにいわゆる大企業病が根強く社会にはびこっていたのである。

責任を自分に帰することを嫌う（責任を負うことで自己の生活権を奪われる社会構造が問題なのであるが…）。
それゆえに、責任を持ってすべてをまとめ社会を引っ張って行こうとする大人物がいない、という不幸に繋がる。
現在混迷する政治とそれに翻弄される社会を俯瞰する時、四〇年近く前に父が残したメモに現在も共通する問題を実感する。
松下塾を経てきた現在の指導者たちは皆それなりに優秀な人々であろう。しかし、つい先日まで権力の頂点にいて、原発問題

を解決すべき立場にいながら、解決どころか当初から自分が目立ちたいがごとく振る舞いで悪い意味でマスコミの注目を集めた人が「福島事故を責任もって解決させる」と断言しながら、その席を外れるや福島を訪れるでもなく、お遍路さんを決めこむ、といった行動で代表されるように、社会をまとめるより自分の将来に気をとられているように思われる人々が社会のリーダーである現実をみると「混乱する世界を渡るための舵取りをするにはとても適任の人物とは思えない」との思いに暗澹とす

ると同時に、四〇年経っても何も変わらないかのような日本人の心が思いやられる。
このコラムに述べてきたような、大震災に際して世界の人々を感銘させた普通の日本人の心と裏腹な指導者たちの内包する問題も実感する。小さい社会でも大企業病はいつしか芽生えて同様のことは起き得る。自制せねばならないと思う。
明治の時代から激動の時期を生きた父―加藤孝夫―の残した日記には、時に改めて感じさせられるものがある。折りに触れて書いてみたい。